

## 【シンポジウムの趣旨】

大きな自然災害が発生すると、さまざまな専門機関等が多様な観測を行い、それらの観測結果に基づいて各分野の研究者が災害の諸側面に分析を加える。その成果は大量の論文等として公表され、災害を構成する各現象の発生機構に関する、ひいてはその学問分野における、新知見につながるものも少なくない。一方、被災した諸施設の管理主体も被害調査報告をまとめ、その中には、発災要因の推定に有用な情報となるものもある。行政機関は、当然、所管の範囲内で各種被害についてその規模等を集計する。救助・救援、復旧・復興等に携わった立場からも膨大な記録が残される。他方で、きわめて多様な個人の体験や思いも、一部は文書や音源・映像等に記録され、さらにその一部は公開される。そして、それぞれに関連する画像情報は、適切に保存されるか否かにかかわらず、たいへんな量に達する。これらは、すべて「災害記録」とみなせるであろう。それにかかわる原資料が散逸する前に広く収集し、整理してアクセスしやすくする、いわゆる災害アーカイブを構築する試みも進んできた。

東日本大震災の発災から6年半が経過しようとする現在、それを顧みた防災体制や防災教育等の再検討・強化と関連して、被災自治体等を中心に「震災・復興記録の収集・整理・保存」が進められ、多くの「震災記録誌」が発行されつつある。これらの大半は、国が東日本大震災復興交付金制度により推奨した事業によるものであるが、その制作方法等については当該自治体の判断に委ねられ、自治体ごとに多様な内容・構成のものが生み出された。これら「記録誌」の全てを閲覧できていないものの、少なくとも従来作成されたこの種の刊行物の中には、(狭義の)行政サービスに直結する事柄に限定したものや、それに専門的報告・被害統計等の引き写しおよび被災談を付け加えたものなどが見受けられ、後世に残し、他地域にも知らせるべき「震災」現象を的確に伝えているものは、意外に少ないように思われる。これら記録誌を、「防災・減災」の目的で後世および他地域の人びとにも正しく伝えるものとするには、人びとの日常的行動範囲に比較的近い空間における、発災にかかわるさまざまな物理的現象、同時並行で行われた避難行動、およびその後の避難生活を経て少なくとも応急的復旧に至るまでの過程を、時空間スケールを整理した上で系統的に記録し、現時点で考えられる問題点およびそれを解決する方向を示す必要があると考えられる。膨大な情報量となるアーカイブと並び、災害過程の道筋を的確に伝える手立てとして、また行政責任を持つ立場から、自治体刊行の記録誌における「編集」の適正さが注目されよう。

本シンポジウムでは、岩手県沿岸で歴史的にも繰り返されてきた「津波災害」に焦点を絞り、岩手県山田町での「震災記録誌」の事例など挙げつつ、「被災自治体等が中心になって発行する震災記録誌」を中心に、地元から多少とも整理されて発信される「災害記録誌」を考察の主対象として、「ローカルな災害記録の実態とあり方」についての現時点でのあるべき方向を議論したい。